あとがき

本論文は、1989年以来15年余りの月日をかけて取り組んできた「インベンション指導の研究」を、理論と実践の両面からまとめたものである。

私は、1974年4月から1995年3月まで、国語科教諭として兵庫県下の高等学校に勤務した。旧制中学校や高等女学校の流れを汲む伝統校(2校)と進学実績の上げられない新設校に勤務し、それぞれの学校において、生徒の実態に即した創造的実践に取り組んだつもりであったが、体系性の乏しい独りよがりな授業になっていると反省させられることが多かった。

転機となったのは、1989年度からの2年間にわたる内地留学である。神戸大学大学院教育学研究科にて浜本純逸先生の教えを受け、自分の研究テーマが明確になってきた。それは、国語科教育の目的を達成するには、「生徒が表現者となる授業」を組織することが何よりも重要であるという自覚である。しかも、それを実現するには、「問題を発見する力」を育てなければならないと考えるようになった。それが、本論文のキーワードとなっている「インベンション指導」である。

「インベンション」は、文章作成の第一段階、即ち「何を書こうかと心めぐらせ、新しいものを考案する段階」を指す修辞学用語である。この段階に指導の手をさしのべることができれば、生徒たちの学習意欲を喚起することもできるようになるのである。

この「インベンション指導」の重要性に気づかせてくれたのは、当時担当していた高校生たちであった。彼らは作文が嫌いであった。課題を与えても、鉛筆を持とうとせず、机の上に突っ伏してしまう。その投げやりな態度に、当初は情けなさと苛立ちを感じずにはいられなかった。だが、それは私の誤解であった。彼らは、ほとんど文章表現指導を受けたことが無く、何を、どう書いてよいのかが分からなかったのである。また、これまでの生育歴において、自分の考えに価値を見出せなくなっていたのである。

そのことに気づき、「インベンション」に重点を置いた指導を展開していくと、生徒たちの表情が明らかに変わってきた。自分に自信を持ち、共感的人間関係が作れるようになった。自己表現の楽しさと内面的深まりを実感した生徒たちの表情は、美しく輝くようになった。

第二の転機は、1995年度である。縁あってノートルダム清心女子大学の専任教員として着任することとなった。「国語科教育法」や「生徒指導の研究」等の教職に関する授業とともに、「日本語表現法」の授業も担当することとなり、まさに、研究と実践を同時並行で進める場が与えられたのである。

その過程で新たに生まれてきた研究課題は、「インベンション指導」の歴史的研究であった。日本の近代作文教育史の中で、「インベンション」の問題はどのように自覚され、実践されてきたのであろうか。そのことを知ろうともせず、日々の授業づくりにあくせくしている実践の底の浅さには、内心忸怩たるものがあった。何とかして、先達の知見を学びなおしたいと願わずにはいられなかった。

こうしたとき、再び内地留学の機会が得られた。本学教職課程の再課程認定や司書課程設置の仕事に一区切りがついた2004年度に、早稲田大学大学院教育学研究科に訪問学者として籍を置くことが認められたのである。早稲田では、再び浜本純逸先生の懇切なるご指導をいただくこととなった。また、早稲田大学図書館に収められた豊富な文献のおかげで、研究資料が容易に手に入る状態となった。さらに、人との出会いも大きい。野地潤家先生、大西道雄先生、速

水博司先生をはじめ数多くの先生方から貴重なご蔵書を貸与していただいた。金子彦二郎（第6章）については、ご遺族から故人の蔵書や指導記録（生徒作文）をお借りすることもできた。

本論文は、こうした過程を経て、理論的・実践的に進めてきた「インベンション指導」の研究をまとめたものである。各章のベースになっているのは、これまで学会誌等で発表してきたものであるが、論文全体の流れを重視して、ほとんど全面的に書き改めた。初出論文については、脚注等に示したので、ここでは省略する。

本論文は、これまでほとんど研究の手が入っていなかった我が国の中等作文教育を対象として、「インベンション指導」の進展の筋道を明らかにした点に一つの特徴があると考える。とりわけ、ジェナングの修辞学理論や金子彦二郎の実践理論を解明した点に新しさがある。また、単に歴史的事実を検証するだけでなく、その知見をもとに「インベンション指導」の原理を整理し、自らの授業実践に基づいた具体的提案を試みた点にもう一つの特徴があると考える。

微力なるが故に、不十分な点もあるが、ともかくも現段階での研究成果をまとめることにした。また、私の視野の狭さ故に、優れた実践例を見落としている場合も多々あろうかと思われる。ご批正いただければ幸いである。

本研究の推進にあたっては、研究の着手時から完成に至るまで、浜本純逸先生から、言葉では言い尽くせないほどのご懇篤なるご指導をいただいた。内地留学期間終了後も、毎月一度は拙い原稿を読んでいただき、そのたびに要所を押さえたご助言を賜った。毎回のように、先生のご助言によって、行き詰まりかけた道筋がくっきりと浮かび上がるという経験をさせていただいた。先生の学識の広さと眼識の鋭さは言うまでもなく、教育者としての人間的温かさに深い感銘を覚える日々であった。末筆ながら、先生のご厚情と学恩に衷心より感謝申し上げる次第である。

2006年9月

田 中 宏 幸

あとがき